

中国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和2年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「中国語」の受験者は667名で、昨年に比べて若干の増加であったが、「外国語」受験者の0.13%となり、数字に表れる変化となった。受験者数は増加を続けており、今後も大学側がより一層中国語を入試に活用することが求められている。引き続き高校で中国語を学んだ高校生が進学に活用できる客観的な水準設定が望まれる。

令和2年度センター試験を以下の3点をよりどころにして、検討・評価に当たることとする。

- (1) センター試験は「高等学校における基礎的な学習達成の程度を判断することを主たる目的とする」試験であるという観点に立ち、高等学校学習指導要領「外国語」の目標を重視する。
- (2) 教育現場からの「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる出題」となっているかについて、次の「四つの基本的要望」が尊重されているかを重視する。
 - ① 細かすぎる難解な語法を問うことはせず、基本的な文法力を問うこと。
 - ② 長文読解は、高校生になじみやすいテーマを選び、分かりやすい簡潔な文章を出題すること。
 - ③ リスニング試験が実施されないことを補うために、ピンインを重視して出題すること。
 - ④ 長文読解においては、内容が抽象的で論理的に説明が難しいような出題は避けること。
- (3) 平成31年度の問題作成部会の見解「問題作成の方針」を参考とすること。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 昨年度と同じく発音の基礎を確認する問題である。

第1問	A	B	C	D
計8問	声母	韻母	声調	発音全体
(計32点)	8点(4点×2問)	8点(4点×2問)	8点(4点×2問)	8点(4点×2問)

昨年は3点×10問、計30点であったが、今年度は4点×8問、計32点の配点となった。

A 昨年同様、見出し語の下線部の声母（子音）と同じものが選択肢の中に幾つあるかを選ぶ形式であった。提示された語句はみな重要語であり、声母を問う問題として適切である。

問1 卷舌音“r”と“l”の判別問題で、見出し語も選択肢も重要語であり、適切である。

問2 卷舌音“sh”と“ch”の有気音と無気音の判別問題であるが、選択肢dを“sou”の音を持つものにするなど工夫が必要であると思われる。

B 例年どおり、韻母（母音）に関する出題であるが、鼻韻母を問う問題もあると良い。

問1 “iao”、“ao”の複合韻母で、見出し語も選択肢も重要語であり、適切である。

問2 “u”と舌歯音と舌尖音につく“i”の判別問題で、ピンインの理解を問う良問である。

C 二音節語について、見出し語と声調の組合せが同じものの数を問う問題である。声調以外に、選択肢の単語に鼻濁音、卷舌音、有気音、無気音などが含まれ、適切である

問1 見出し語も選択肢も重要語であり、適切である。

問2 見出し語も選択肢も重要語であり、適切である。

D 声母・韻母・声調の全てが同じである漢字を含むものが幾つあるかを問う問題で、やや難

易度は上がるが、より正確な発音知識を総合的に判断する適切な問題である。

問1 選択肢の語句はいずれも重要語であり、適切である。

問2 選択肢の語句はいずれも重要語であり、適切である。

第2問 出題形式・配点とも昨年度同様の出題である。

A 文は会話文と選択肢ともにピンインで示してあり、ピンイン学習を重視する作問となっており評価できる。

問1 会話文、選択肢ともに難解な語句はなく、文中の“想运动运动”から“走着去”を含む正答を選びやすく、一考を要すると思われる。

問2 Aの会話からBが家具に対してプラス評価をしているのは“很不错”を含む正答のみであり、他の選択肢の反語表現も容易である。もう一工夫欲しいところである。

問3 正答以外は“行啊”、“得复习”、“真不巧”を含む返答で、電話を待つ状況にないことが分かりやすい。

B 空欄補充の問題。単なる日本語の置き換えでない知識を要求される面が強い。

問1 「(学んだ内容を) 強固なものにする」に合う動詞を選択する問題で、単語の用法の理解を確認する良問である。

問2、問3 ともに類義の名詞や動詞の中から適切なものを選ぶ問題だが、日本語から類推の利くものもあり、示した文と選択肢ともに一考の余地があるように思われる。

C 類義語を問う問題であるが、「適当でないもの」を選ぶという設問形式は難度が高くなる。選択肢はいずれも重要語である。

問1 文意に合わせて“帮忙”の前に置かれる語を選ぶ設問だが、基本的な修飾語が選択肢に含まれ、解答が容易だったかもしれない。

問2 目的語との組合せにおける適切さを問う問題。基礎的な語法の理解を確認する良問である。

問3 “特殊”は限られた動詞以外は形容詞的用法に限られることを確認する適切な設問である。

第3問 和文中訳、中文和訳を通して、中国語の表現力、理解力を測る問題であり、設問形式や設問数は昨年度と同じである。

A 和文中訳問題で、与えられた八つの単語から五つ選び並び替えるもので、選択肢の語句も重要語の範囲内であり、文法や語句の用法の理解を確認する問題として適切である。

問1 「誰にもわからなかった」の訳で“没有一个人”を問うもので、適切な出題である。

問2 “哪怕”「たとえ～でも」の用法の理解と“再”“多”の位置を見る良問である。

問3 「一歩たりとも～ない」から「どこから手を付けてよいかわからない」を類推し、“从哪儿着手”が導き出せるかが問題であり、よく練られた良問である。

問4 「だけじゃない」に当たる“不光”と「はず」に当たる“应该”を導き出せるかが問題であり、語句に難解なものもなく良問である。

B 和文中訳の問題で、選択肢の中国語文はピンインで示され、口語的な表現や基本的な文型の理解を問う問題であり、適切である。

問1 選択肢中の反語や可能補語、可能性の“会”などの理解を確認する良問である。

問2 「一睡もできなかった」の和訳の理解を確認する適切な設問である。

C 中文和訳の問題で、問いの文の中国語はピンイン表記である。

問1 中文の意味の理解を問い、日本語中国語の訳に乖離がなく適切である。

問2 “不论～还是…”“干部”“不够”の理解を確認する適切な設問である。

第4問 A・Bは図表と会話文等を示し設問に答える出題。Cは会話文の空欄補充問題である。

A ケーキ単品の値段とセット売りの値段を示した絵が2枚示され設問に答える問題。

問1 図に示された状況に合致した文を選ぶ出題だが、選択肢の文は比較構文と“有的”、“都”の組合せで変化がなく正答しやすい面があったと思われ、一考を要する。

問2 会話文の空欄に入るセット売りを選ぶ問題。特に33は二人とも50元しか持っていないと容易に分かり、前半が分からなくても正答が絞られる。一考を要すると思われる。

B ホテルの予約サイトの表を見ながら、会話文を見て答える問題。実際的な運用能力を問う工夫した問題と言える。問1は“加床”を考えに入れる必要があるなど練られた良問である。問2は子どもの会話文が単純であるなど正答が得られやすいように思われる。

C UFOを見た話題の会話文。

問1 反語表現で言いたいことを理解しているか問う問題で適切な設問である。

問2 言語的な材料よりも会話の流れから推測されやすく思われる。一考を要する。

問3 流れから推測しやすい。選択肢の難度を上げるなど考える必要があるように思われる。

第5問 エッセイを読み、出来事の流れや人物の心の動きを読み解く読解問題である。

貧しかった主人公、陈志忠は刻苦努力して会社を設立し、自分と同じような境遇の若者に奨学金を出し支援していく。その後、人に騙されて会社は倒産するが、大学進学を支援し弁護士になった余梅に助けられ、会社を再建するというストーリーである。

問1 四つの空欄部に入る動詞を選ぶ問題で、類義語から語句の用法を測る良問である。

問2 “一路走来”“不容易”の日本語訳として選択肢にも工夫が見られ、良問である。

問3 疑問詞の呼応表現の訳の理解と選択肢の文の理解を測る良問である。

問4 空欄部に入る語句を選ぶ問題で、“掏钱”は日常会話の中でよく使われるが、教科書ではあまり出てこない。それぞれの動詞の意味用法の理解を見る適切な問題である。

問5 ストーリーの展開を踏まえ、文を組み立てる問題であるが、配列する文が4文しかないため、5文ないし6文あれば、より思考力を確かめることができる。一考を要する問題である。

問6 全文読解問題で、文章を細部まで読み取っているかを確かめる適切な問題である。問5と問題が重なっている点は一考を要する。

第6問 マスコットキャラクター「くまモン」を題材にキャラクターの経済効果や費用対効果について述べている。とりわけ難解な文章ではないが論旨をきちんと押さえることが求められる。

問1 文の流れから「人間と変わらない」ことは明白なので、選択肢の表現のバリエーションを増やすなど、思考させる工夫が必要と思われる。

問2 空欄に入るべき文を選ぶ問題で、文はピンインで示されている。選択肢に特に難解なものはない。文章の流れを正確に把握しているかを問う適切な問題である。

問3 キャラクターがシンボリックの意味と経済効果を併せ持つことは、文章を読む以前に多くの受験者が知識として持っている可能性がある。一考を要する。

問4 空欄に入る適切な語句を選ぶ設問で、難しい語句や細かい文法を問うことはなく、文章の論旨を分かっているかを見る適切な問題である。

問5 “熊本熊”に捉われず、論点を捉えているかを問う、適切で練られた良問である。

問6 問5同様、文章全体の要旨を捉えられているかを問う、適切な設問である。

問7 選択肢に紛らわしい日本語はなく、本文の内容理解を見る適切な問題である。

3 分量・程度

(1) 分量

今年度は第5問が33字×19行、第6問が33字×23行（句読点・改行含む）となり、文章量については約600字程度とお願いしてきたとおりであり、適切である。その一方、長文読解については、もう少し長い文章を考察し理解する能力を試す設問も求められると思われる。ただその際には80分の試験時間を考慮しながら本文の分量と設問の難度のバランスを考えていただきたい。

(2) 程度

今年度の設問は、高校生にとって難解なレベルのものは多くないが、第4問のAは高校生のレベルに合わせた出題と、第6問についてはもう少し論理的な文章の出題をお願いしたい。

4 表現・形式

内容	発音	語句	中国語の表現力	文・会話の流れ	長文読解	長文読解
設問	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問	第6問
解答数	8	9	12	8	7	8
配点	32点	36点	32点	32点	31点	37点

5 要 約

令和2年度センター試験は、設問形式や内容、単語の選択において高校生レベルの出題が多く、高等学校から中国語を学び始めた受験者を意識した出題者の工夫が感じられた。他の外国語と平均点の差が広がったが、受験者が増え、高校3年間で学ぶ中国語のレベルに近づいてきたと考えられる。

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年	令和2年
受験者数	427	482	558	574	665	667(+2)
平均点	158.63	158.02	164.91	154.90	150.89	167.41(+16.52)

受験者の増加は2名であったが、外国語の受験状況としては0.01%の増加であり、外国語における中国語科目の社会的なニーズの高まりを示していると考えられる。今後も大学入学共通テストの科目として有効に活用されることを希望する。全体としてはおおむね適切な問題だったが、今後の出題として以下の点をご考慮いただきたい。

- ・今年度高得点だった設問の難易度を次年度に極端に上げないようにしていただきたい。
- ・第1問の単語の知識を問う問題では、日頃学んでいる見慣れた単語を選んでいただきたい。
- ・第4問Aについては図表を効果的に使った作問を期待したい。第5問、第6問の文章量は、設問の難易度とのバランスを考慮していただきたい。
- ・第6問の長文は例年評論文であるが、内容が抽象的すぎないような配慮をお願いしたい。
- ・高等学校から中国語学習を始めた生徒たちが「是非受験したい」と思う出題をお願いしたい。
- ・今年度の報告書に則して、高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる出題を今後ともお願いしたい。

第2 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

令和2年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、「中国語」が実施されるようになってから、今回で24回目となる。中国語の受験者数は平成27年から増加傾向が続いており、今年度センター試験全体の受験者数が減少する中でも中国語の本試験受験者数は昨年度より2名増加の667名であった（文末グラフ参照）。

中国語問題作成部会は、本年度も以下の原則に基づき試験問題を作成した。

- ・センター試験の基本原則に従い、入学志願者の高等学校段階における基礎的な学習の達成程度と学習成果を判定できる問題を作成する。
- ・歴代の中国語問題作成部会が作成した出題方針・基準を基本的に遵守する。出題方針と基準は日本の高等学校における中国語教育の実態を踏まえ定められた。時代の要請に応じ一部変更を加える場合は、受験者に過度の負担が掛からぬよう配慮する。
- ・高等学校教科担当教員（以下「高校教員」という。）からの前年度センター試験に対する意見・評価を尊重する。

具体的には以下を達成指標とする。

- (1) 出題範囲：現行の高等学校学習指導要領（外国語編）に記載されている内容に準拠する。ただし英語以外の外国語科目には明確な学習の指針がないため、中国語問題作成部会の基準に沿って出題範囲を定める。
- (2) 出題形式：平成9年度から平成31年度の出題形式に準拠し、必要に応じて一部変更を加える。
- (3) 出題内容：特定の教科書や分野・領域に偏らず、単に知識だけではなく、思考力や応用力を問う内容とする。例えば、図表を組み入れた空間認識や情報処理面の理解力を問う問題、コミュニケーション力を間接的に測るため、漢字の発音を示すローマ字表記（ピンイン）から有意の文を組み立てる問題を取り入れる。
- (4) 問題構成：設問数、配点、設問形式等が適切な構成となるようにする。
- (5) 難易度と得点分布：日本の高等学校以外場で中国語学修の機会を持つ受験層の増加を考慮し、適正な難易度と得点分布となるよう努める。
- (6) 適切な文章表現・用語となるよう作問する。

2 各問題の出題意図と解答結果

令和2年度の問題の種類と各設問数、配点の内訳を【表1】に示す。大問6題、200点満点は昨年と変わらないが、第4問の出題意図の変更（後述）に伴い、受験者の解答時間を確保するため、第1問（発音問題）の小問数を昨年度の計10問から計8問に減らし、解答数を計54から52とした。ただし、実際のコミュニケーションの場面をより重視する観点から、それに関わりの深い発音問題については、これまで1問3点としていた設問を全て4点として配点を30点から32点とし、第5問と第6問の配点を32点から31点とした。

【表1】

問題の種類	発音	語句	表現理解力	会話力	長文読解	長文読解
問題番号	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問	第6問
解答数	8	9	12	8	7	8
配点	32点	36点	32点	32点	31点	37点

第1問：発音の基礎、及び正確さを確認する問題である。

音節の三つの要素（声母、韻母、声調）について問う出題となっている。日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。語（単語）のみから出題するか、それとも語句（動詞＋目的語）からも出題するか、については作問に当たって議論のあるところだが、今年度は語（単語）のみから出題した。試験全体の平均点（以下「全体平均点」という）と比べてみると、正答率が高いものの、識別力のある問題となっている。高校教員からは、発音問題全体に関して、見出し語が常用される単語になっているとの御意見を頂いた。

A：[1]は捲舌音“r”と舌尖音の“l”、[2]はともに捲舌音の“sh”と“ch”の区別を問うもので、正確な発音の習得と知識が求められる。高校教員からは、[2]に関して、舌歯音の選択肢を入れてもよかったのではないかと御指摘を頂いた。

B：韻母に関する知識を問うもので、[3]は“iao”“ao”という介音の有無の区別、[4]は実際の発音の際に紛らわしい“u”と舌歯音に続く“i”及び舌面音に続く“i”との区別を問うた。

C：声調に関する知識を問う問題で、二音節語における声調の組合せを問うており、四つの二音節語、即ち八つの音節に関して正確に把握していなければ正解は導けない。中国語を学ぶ初学者にとっては習得に苦勞するポイントであると同時に、相当中国語に習熟した者でも正確な知識をままたくことがある。

D：声母・韻母・声調の全てが同じである漢字を含む組合せが幾つあるかを問う問題で、八つの二音節語、即ち合計16の正確な発音を把握していなければならない。特に正答率が低かったのが[7]であり、今回の問題全体を通して3番目に低い正答率となっている。

第2問：コミュニケーション力（会話力）を測る問題である。

Aについてはこれまで同様、会話文、選択肢をピンインで出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは、中国語の四技能をバランス良く習得するために必要であり、日本の高校における中国語教育では極めて重要である。高校教員から、易しい単語を用いた展開のある会話をピンインで出題する形式は、リスニングの代替以上の意味を持ち、生徒の学習の動機付けの観点からも、適切であるとの評価を受けているが、選択肢の作り方については正答を一つに絞りがやすすいので工夫が必要であるとの御指摘を頂いた。例年正答率が高めの問題であるが、特に[9]、[10]は正答率が高く、識別力に課題を残した。今後の作題に当たって、より留意されることを望む。

Bは文章の一部をブランクとし、適切な語を選ばせる問題で、単語の意味、また用法に対する正確な知識を問う問題である。あわせて類義語の区別も問うた。[13]、[14]は正答率が非常に高く、十分に識別力のある問題とはならなかったが、出題のレベルとしては適切であるとの評価を受けた。これに対して[12]は、教室では常用される中国語であるが、成績下位層の受験者の正答率がやや低かった。

CはBと同様に、単語の意味、また用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることで難易度を上げており、いずれも適切な識別力を備えた問いになった。[17]は、成績中位・上位層にも識別力が高かった。正答は③の“特殊”であるが、適当でないものを選ばせる出題にもかかわらず、日常的によく用いられる語の方の“特別”、“尤其”を選ぶ誤答が目立った。高校教員から、単語のレベルや出題内容が適切な良問であると評価されている。

第3問：作文能力及びコミュニケーション力を測る問題である。

和文中訳と中文和訳を通して、中国語の表現力、理解力を測る問題であり、設問形式や設問数は昨年度と同じである。

A：日本語の文を読み、与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る、和文中訳

の設問である。八つの選択肢から必要な五つを選び正しく並べる問題は、受験者が比較的苦手とするものであり、全体的に識別力が高いものであった。しかし今回は比較的正答率が高かった。特に問1 [18]、[19]は全体の得点率をかなり上回る正答率であった。それに対し、問2 [20]、[21]、問4 [24]、[25]は全体平均点をやや下回った。いずれも基本的な常用句を問うものであり、「値が張る」という表現は“貴”や“再花点儿钱”など複数あるけれども、その中から空欄の数など与えられた条件に合致したものを選ぶ能力が問われた。

B：和文中訳問題で、選択肢の中国語はピンインで表記してあり、日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を測ろうとするものである。問1、2ともに日本語の表現を的確に理解したうえで、ピンインで示された中国語の選択肢の全てをそれぞれ最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。問1 [27]の正答率は非常に高かった。問1 [26]も、問1ほどではないものの、正答率が高かった。

C：中文和訳で、問題文の中国語はピンインで表記してある。選択肢の日本語文を最後まで読み解かなければ正解できないように工夫した点は、上記Bと同様である。問1 [28]は正答率が低く、ピンインで示された文の論理的関係を正確に日本語訳できるかどうかが問われた。問2 [29]も問1ほどではないものの、全体正答率を下回る正答率であった。対応する日本語の表現の正確な理解が問われた。

高校教員からは、第3問を通じて、日本語文が高校生にも理解しやすい平易なものになっているとの御指摘があった。あわせて今後もそのようにしてほしいとの要望があった。

第4問：日常生活や学習活動に関連した中国語の運用能力を判定する問題である。中間A・Bでは図表等も素材として、言語情報处理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得るようにしている。高校生の現実に即した設定を取り入れ、日常生活に関連した中国語の運用能力を判定するよう注力した。中間Cでは会話の流れを追いながら文脈の構成力を問う。

日常生活に即した素材からの出題であるため、従来出題には使われなかった語彙もこの第4問に限り取り入れている。ただし、受験者にとって難度が高い語彙は避け、正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう、配慮した。また、現実の生活の場では随所にイラストや図表などを使って情報をスムーズに伝える工夫がなされており、ここでイラストなどを用いるのは、そのような日常生活の中での中国語の運用能力を問うことを主眼としている。

Aは洋菓子店で買物をするという場面を設定している。問1は、ケーキの価格を示すイラストを基に、中国語の一文に空けた空欄に四つの選択肢から適切なものを選び、中国語の比較表現が理解できているかを問うた。問2では、設定された場面において、会話の流れを的確につかみ、イラストと照らし合わせて正答を得る空欄補填問題である。

高校教員からは、新しい出題の形式であるが、中国語の教育現場ではよく取り入れられている素材で高校の授業の雰囲気が出ており、特にBは中国事情を踏まえた素材であり、語彙の意味も状況で判断できるので、その難度は適切であるとの評価を得た。ただし、Aはレイアウトに配慮するよう御意見を頂いたので、今後の大学入学共通テストでの検討課題としていただきたい。

Cは昨年度を踏襲した会話文の空欄補填問題であり、会話の流れを的確につかむコミュニケーション能力を測ることを狙いとし、会話文、選択肢共に中国語で表記している。

第4問の識別力は低く、特にCは成績下位層もふくめてほとんどが正答を得ていた。

第5問と第6問は、ともに長文読解力を測ることを主たる狙いとしている。昨年度までと同様、第5問は物語文や随筆に類するもの、第6問は論説文から素材を選んだ。また高校教員から、問題文は600字以内が望ましいと指摘されていることを踏まえて、受験者に過度な負担とならないよう配慮した。2題とも、使用語句、表現などにも留意しながら、センター試験にふさわ

しい内容に書き換えている。素材や書き換えなどについても、高校教員から毎年提出されている要望を反映するよう努めている。

第5問：600字ほどのエッセイを読み、出来事の流れや人物の心の動きを読み解く力を測る問題である。苦労して起業した陳志忠なる人物が周囲の反対を押し切って貧困な学生の学資を援助する。余梅も彼が援助した学生の一人であった。後に陳志忠は人に騙されて破産する。弁護士となった余梅は、それを知り、陳志忠を窮地から救ったのであった。

38 は四つの空欄に入れる適当な語句の組合せを選ばせる問題であり、動詞の用法、読解力を問う問題で、正答率は全体の平均と同程度であった。39 は文の意味を日本語で問う問題であり、文脈に即した文意を日本語で把握できていなければ正解が導けず、識別力が比較的高かった。40 は、下線部で示された箇所の文意を中国語で問う問題であり、疑問詞の呼応を問う問題であったためか、識別力が高かった。41 は、空欄に当てはまらない動詞を問うものであり、文脈を考慮しながら慎重に語を選択しなければならず、識別力が非常に高いものとなった。42 は、ランダムに並べられた中国語文を論理立てて整序する問題であるが、正答率は高かった。教科担当教員からは、選択肢が少なかったのではないかとの御意見を頂いた。43、44 は、文章全体を読解した上で、内容に合致する日本語文を選択する問題であり、細部にわたる正確な読解力が問われたため、識別力が高いものとなった。高校教員からは、42 と問いが重なっているとの御指摘を受けた。

第5問は、全体として適正な識別力のある設問となった。高校教員からは、平易な文章で高校生にも感動が伝わりやすいものとなっており、適切な題材文であるとの評価を頂いた。

第6問：全体として、適切な識別力のある問いとなった。公式キャラクターとして知られている「くまモン」の意義を文化面と経済面から論じた論説文である。45 は文脈を読み取る空欄補填問題であり、選択肢の中国語を正確に把握しているかを問うたが、正答率はかなり高かった。

46 も文の論理的展開に関わる出題で、選択肢をピンイン表記にしたことでやや難易度が高い。47、50 では、段落と文全体のテーマについて問うた。ともに正答率は全体平均点を上回り、成績中位層、上位層は出題文をおおまかに把握していた。識別力が高かったのは、問5と問6である。いずれも、中国語の表現を正確に捉えているかを測る出題である。問5 49 では、④と①を選んだ受験者が多かった。下線部④に続く句だけを部分的に読んだため正答できなかったと考えられる。問6 51、52 では、①、②を選ぶ誤答が多かった。いずれの選択肢も常識に沿うものだが、本文ではふれておらず、本文の内容と一致するものではない。高校教員からは、ゆるキャラを題材にして筆者が何を述べているのか、読み取れていないのではないかと御意見を頂いた。

3 ま と め

平均点は167.41点(200点満点)、100点換算で83.71点である。最高点は200点、最低得点は26点、標準偏差は30.31であった。中国語は他の外国語と比べ平均点がやや高い傾向にあるが、中国語の受験者層の特性を考慮すれば、いたずらに平均点に惑わされることなく、高校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験という性格を堅持すべきだと考える。高校教員からも、高校からの学習者が対応できるような作問を強く要望されており、問題作成の方針が平均点によって揺らぐことは望ましくない。

平成18年度以降の15年間の受験者数及び平均点の変化は【図1】となる。本試験受験者は昨年の665名から2名増加し667名となった。これは中国語が出題されるようになって以来、最多の人数であり、高校において中国語教育が着実に定着しつつあることの証左と見ることができよう。平

均点はここ数年100点換算で75～85点前後の点数で推移している。

今年も高校教員の方々をはじめ各方面から有益な御意見を頂いたことに、深く感謝したい。

【図1】

